

川端文学研究会 会報

第二号

伊豆のエッセイと山峡幻想

山田 吉郎

川端康成には『伊豆の踊子』や『温泉宿』をはじめとして伊豆の風土を背景とした鮮烈な作品系列がある。私自身神奈川の西寄りの山峡に住んでいるので、伊豆もわりあいに近く、川端の伊豆ものに親しみを抱いて久しい。

私が心惹かれるのは、実は伊豆を舞台にした小説よりも、むしろエッセイの方である。それも青年期の伊豆ごもりのエッセイに愛着を感じている。

大正十三年、大学を卒業した川端は伊豆に引きこもる。横光利一をはじめ文学仲間が大勢いる東京を離れ、一人ほんとうに侘しい山峡に暮らすのである。養生に適した温泉が伊豆に多く、川端の傷魂を癒す第二の故郷とも思える土地であったことは分かるが、それにしても異色の山住まいではあろう。

そんな山峡ごもりの随筆には、「湯ヶ島温泉」「温泉通信」「燕」「初秋旅信」などがあるが、中でも山ごもりの日常においてふっと幻覚が露出する描写に惹きつけられる。

たとえば、「温泉通信」に枯草に寝ころんで竹林を眺める場面がある。

私は自分がその竹林の気持になつてしまつてゐる。一月も人と話らしい話もせ

ずに、ほうつと空気のやうに澄んで、自分の感情や感覚の戸の開け閉めを忘れてしまつてゐる。

ひと月も人と話をしない山ごもりを、むしろひそかに誇示しているような語り口である。また、「燕」では、山の温泉場に閉じこもっている川端が出遭う「人間の魔」のことを書きとめてゐる。

全くあんまり独りぼつちであると魔に襲はれます。同種類のいきもものである人間の魔にです。(中略)ふつと眼を上げたり横を向いたりした瞬間、眼の行く先にちらつと人の姿が見え、その姿に引かれて眼を動かしたやうな気がするの、何だかぎよつと身が縮むやうです。空耳でなく空目なのです。

山峡の孤独が見出したこうした幻想の鉾脈は、残念ながら、その後十分に掘り下げられていったとは言いがたい。初期の佳作『白い満月』にはそうした幻想性が色濃く揺曳しており、その意味では私の好きな作品である。ともかくも、当時のモダンズムへと向かう潮流の中にあつては、コミユニケーションを絶つた山峡幻想から離脱するのも半ば必然の選択ではあつたらう。

私事にわたるが、丹沢の山ふところ、実朝の首塚のほとりに住みつづける私にとって、

川端の山峡ごもりの幻想性にはつよく牽引されるものを感じる。川端が掘りかけた幻想の鉾脈が気になつてゐる。萩原朔太郎は小説『猫町』の冒頭で単なる空間移動にすぎない旅の退屈さを語っていたが、今の私もむしろ見慣れた風景の裏側へとくぐりぬける方途として、若き日の川端がこころみた山峡幻想に心を寄せてゐる。

継続的な基礎研究の必要性について

片山 倫太郎

近頃、私は若き日の川端が摂取した宗教関係の文献について、少しずつ調査をおこなつてゐる。まずは『海の火祭』にターゲットを定めるところから始めたのだが、当初予期した以上に成果はあがつてゐる。

順次、勤め先の紀要に発表してゆくつもりでゐる。現時点では、「川端康成における宗教関連文献の受容についての調査研究(一)」「海の火祭」および「抒情歌」における仏書二点(一)、「岡山文学部紀要」第四一号(平成十六・七)が既刊であり、入稿をすませたものに、「同(二)」雑誌「変態心理」掲載の民俗学文献他(一)、「岡山大学文化科学研究紀要」第十八号(平成十六・十一刊行予定)、「同(三)」ギリシャ神話の花物語(一)、「岡山文学部紀要」第四二号(平成十六・十二刊行予定)がある。ここでは、村上专精『仏教忠孝編』(明治二十六年十月 哲学書院)、

岩野真雄訳『現代意識 維摩経・解深密経』
(大正十一年六月 仏教経典叢書刊行会)、三
枝十一「輪廻転生に関する伝説(上)」、加藤
元一「珍しい睡遊の例」(ともに「変態心理」
第一巻二号 大正六年十一月)、橋本墨花『花
と花言葉』(大正十三年九月 紅玉堂書店)を、
典拠として認定している。

短期間のうちに、比較的容易に、これらの
典拠をみつげることができた。インターネッ
ト上の図書目録の充実や、雑誌の復刻版の刊
行等、ツールの発達に負うところが大きい
のだが、また、川端が典拠の存在を隠すこと
なく、かなり生な形で、小説に引用している
ことも、発見をたやすくした要因である。「無防
備」なままに、ヒントは作品中にころがって
おり、それを手がかりにして地道に調査して
ゆくならば、かなりの数の典拠が認定でき
るものと思われる。

典拠探しというものは、ややもするとその
ことだけが自己目的化し、発見の快感に埋没
してしまう危険もある。しかし、これは国文
学研究の基礎の一つである。長谷川泉、武田
勝彦、小林芳仁、羽鳥徹哉等の先達の研究が
現在でも大きな有効性をもつ理由の一つは、
その実証的、注釈的性格にあると思われる。
そして、こうした先達の後は、注釈研究がな
おざりにされてきたという印象は否めないの
である。

川端が引用を多用したことは、良くも悪く
も、ユニークな小説作法である。注釈研究は

そうした作家の具体的な筆遣いを彷彿させる
ことになるが、また、引用の問題は、たとえ
ば間テクスト性といった理論的な観点をすぐ
に呼び起こす。テクストと主体をめぐるこの
哲学的な議論は、もしかすると、川端文学と
の間にながしかの連接を見いだすことがで
きるかもしれない。そうした理論的な発展の
可能性を一方に想像しつつ、いまはあらため
て基礎研究の重要性を感じている。

川端康成と音のない世界

張 月 環

去る五月二十二日(韓国)日本語文化学
会主催の「2004年度春季国際大会」(ソウル・
国民大学)で『感情装飾』における「音の
ない世界」「火に行く彼女」「弱き器」「心
中」をめぐる「」を発表した。

この十数年来ずっと川端文学の「音」につ
いて研究してきたが、最近「音のない世界」
という言葉にひっかかりを感じていた。指導
教官赤羽学先生は書簡で、「音のない世界を望
むのは自分の感情を閉塞することである。十
分愛を抱きながら、その愛をまっすぐに表現
できない川端のジレンマと考えられる。」と教
示してくださった。また羽鳥徹哉先生は川端
の音のない世界を考えることが後の小説
密閉性の高い「密室」的な作品及び外界の世
界を遮断した物語を見ていく上でも重大な働
きをすると思われると述べられている。

川端の音に関連した光、純粹、距離等が川
端文学の美を創出する一方、音のない世界が
彼の心の奥底に封印されているように感じら
れる。

一筋縄ではいかぬ、川端の「愛」と「音」
とはどのように繋がっているのか、考えるべ
き余地はまだ十二分にあると思う。

耳を澄ませば、色々な音が聞こえてくる。
森に足を踏み入れるとそこは透き通った音に
満ちている。風の音や水の音、鳥のさえずり、
木々のささやき……。また、大木の幹に手を
当て心静かに耳を澄ませば、木の鼓動をその
手にその耳に感じとることが出来る。そして
木と自分は互いの鼓動を通じて繋がっている
こともはつきりと分かる。自然界の音に包ま
れていると、いつしか恍惚の境地に誘われて
行く。

音の世界を生命の世界とするなら、音のな
い世界はなんと寂しい世界であろうか。

台湾は二〇〇四年三月の大統領選挙以来、
野党と与党が対峙し、一段と騒がしくなっ
てきた。いまや望まれるのは川端の秋の蟋蟀の
ような清音ではないだろうか。

川端康成と千葉県印旛郡本桮村

鈴木 伸一

冒頭から私事にわたり恐縮だが、現在の私
の居所、千葉県印旛郡本桮村と川端康成との
関係について、ご紹介申し上げたい。本桮村

との関係は、「土の子等」という昭和十八年十月の「婦人公論」に発表された一文に見られる。『川端康成全集』二十七巻（新潮社、昭和57・3）の「解題」によれば、「今日に至るまで、著者のどの刊本にも収められてゐない」ものであるという。「土の子等」の冒頭には、

吉植庄亮氏の農場では、ほとんど国民学校の児童の勤勞奉仕だけで、稻を作つてゐると聞いて、七月十三日に、その實際を見に行つた。

とある。川端は、「吉植庄亮氏の農場」視察へ訪れる地理的關係から、成田線の安食駅を下りて、長門川（「土の子等」、以下注記のない限り、引用は同文。）を、舟で渡り、本埜村に入った。本埜村は、千葉県の西北部にあり、大正二年に旧本郷村と旧埜原（やわら）村が合併し、誕生した村で、平成十六年八月現在の人口は約八千人である。現在の東京からのアクセスは、上野駅から常磐線我孫子駅にて成田線に乗り換え、小林駅（印西市）もしくは、安食駅（安食町）で下車する。その他の経路としては、都営浅草線より直通の北総鉄道線印西牧の原駅より入ることができる。

吉植氏の農場については、吉植庄亮氏が出した「吉植農場小作地設定二就テ」（本埜村史 史料集近・現代編）千葉県印旛郡本埜村、本埜村史編さん委員会、昭和60・3）により概観することができる。この文書は、入植者募集の文書で、昭和元年に入植者を募り始められたという。「吉植農場」の所在地は、「千葉

県印旛郡本埜村大字下井」とあり、「省線成田線安食駅ヨリ十五町ノ地点本埜村大字下井二アリ印旛沼ノ開墾ニヨル」土地であるとし、「其面積六十五町歩」という広大なものであった。

「土の子等」では、「吉植農場」の「勤勞奉仕」者「二千名」の大半を占めている本埜村の「第一国民学校」と「第二国民学校」の児童たちの「綴り方」から始まり、子供たちの真面目な農作業の様子などが紹介されている。「勤勞奉仕」そのものは、当時の時局の反映であり、世相の厳しさを看取せざるをえないが、裏を返せば、そうした事象を川端がどのようにとらえていたのかを把握することにより、川端の時局認識を裏付けていく貴重な資料ともなりうるのである。「日本の母」「英霊の遺文」等の戦時中の川端の発言の一つとして、「土の子等」の意義も大きいと判断できる。そうした資料の分析をもとに、拙論「川端康成の政治観 時局認識に関する一考察」（『一松第十四集』平12・3）を発展させる形で、実地調査の結果を近いうちにご報告申し上げますたいと考えている。

文学の研究とは何？

東 弘 毅

川端の作品と向きあつてもう何年になるか。今更、考えるべくもないが、この人や作品に關した論評・解説ほど多岐にわたる例は少

ないのではないか。

例えば、「雪国」など、岩田光子編に成る『雪国作品論集成』をはじめとしてこの種の解説書や論文集を探していくと、もう、限りはない。

その「雪国」だが、私のような理解度の浅い者はその分析や論評の幅が広がり過ぎると「雪国」が果して十二であるのか解らなくなってしまう。

もつとも、国境の…… のあとに続く「夕景色の鏡」の話はどの論者の見方も大体似通っているが、基本的なものとして島村が駒子に向ける心情となると、百人百通りとは言わないがいろいろな捉え方があるようで、こうなると当の本人の川端に聞いてみないと解らないような気持になってしまう。

きのうも「作品論集成」に掲載されている田嶋陽子の「駒子の視線から読む『雪国』」に目を通して、前半部分は 成程、このような捉え方もあるのか…… と読み続けていたが、あとの部分が近づいて、あの田嶋陽子の見方が表面に強く出すぎてイヤになってきた。

成程、小説の解釈は自由だからどの作品にどのような論評を加えようと、他人が口を挟むことではないが、少なくとも「雪国」という作品は、自分が持つ一つの思想や理念のワクの中だけで理解して強調されすぎると、作品自体の色彩が変つてしまうおそれがある。と書いてしまうと、ではお前は「雪国」を

どう捉えているのかと即答を迫られそうだが、私の場合、川端の小説は必要以上にむずかしく考えない事になっている。

となると、川端の作品を文学レベルで考えていないように思われるかも知れないが、例えば純文学といわれる作品にしても、全て学者レベルで考えようとすると、面白さよりも先にむずかしさを感じるようになる。

これは今世間で多くみられる、中高年者向けの「教養講座」に例をとるとハッキリするが、こんな事も原因してか最近「本」を読む社会人や学生が減少し、国語や文学に対する理解度の浅い学生が「文系」といわれる学部生にも多くみられる。

その波及的現象として日常使われる言葉が乱れ、手紙も満足に書けない大人が氾濫している。

そういう意味では羽鳥氏の文献にみられる諸説は、我々にも解り易いし参考になるところが多い。

現在、かなり高いレベルに在る「川端文学研究会」の会報に、このような駄稿がもし掲載されると非難をあびることも覚悟のうえだが、私は今、文学の研究とは果して何か、出発点に戻って考えている。

十月十一日記

七十六歳

川端康成におけるモダニズム

仁平 政人

私が現在関心を抱いているのは、川端康成の文芸活動と二十世紀初期の所謂モダニズムの動向との交通である。川端が「新感覚派の旗手」であったことは文学史的な常識として定着しているが、その一方で初期川端の前衛主義的な言説や実験的なテクストの性格は、なお多くの点が未解明のまま残されているように思われる。例えば、川端がその初発期から言語・文章に対する強い問題意識を示していたことは既に指摘されてきた通りだが、こうした川端の認識が一面で一九二〇～三〇年代における文芸観の転回と対応していることは見過ごすべきではないだろう。詳細は別稿に譲るが、川端の文芸観は、約言すれば、慣習化された言語の革新を通じて人間の認識の（さらには生の）ありようを更新することを理念とするものであり、川端における新感覚主義とはその方法的立場として位置づけることができる。そして重要なのは、こうした初発期川端の理念的立場が、その高い断片性を特質とする小説様式をはじめとした以降の多様な文学的営為と明確な対応を示していると共に、他方では「表現主義」の文脈における文人画再評価の動向等との関わりを通じて、その「東洋主義」的立場の成立を導いていったと考えられることである（川端が晩年まで「新感覚派」としての自己規定を行っていた

ことも、以上のような脈絡から再考することができよう。こうした点を含めて、川端の文学的営為については、盟友・横光利一とはまた別の形によるモダニズム文芸の試みとして、その同時代的な位相を改めて多面的に検討する必要があると思われる。とは言え、川端のテクストを単に同時代の文脈の中に位置づけることのみが重要なわけではあるまい。むしろこうした観点を、川端のテクストが様々な形で孕む奇妙な魅力に接近するための一つの補助線にすることができればと考えている。

鈴木彦次郎に関して、二つ

須藤 宏明

今年の夏は、何度か石川啄木記念館を訪れた。訪れたと行っても、勤務先から車で二十分弱なので、たいしたことではない。駒場や横浜の近代文学館に行くことを思えば庭みたいなものである。

学芸員の山本玲子氏によると、啄木研究では新感覚派やそれに纏わる文学者たちが、どのように啄木を捉えていたのかという問題を正面から扱ったものは、ほとんどないということである。最初の啄木全集が出されるのは大正八年であり、これはかなりの版を重ねている。これを契機に啄木の読者が広まったということであろう。彦次郎も丹念にこの全集を読んでいることを確認したのだが、どうやら川端もこの全集に興味を持っていたようで

ある。「文芸時代」の「合評会」で川端は、彦次郎が「虚無思想」に石川啄木の記念碑建立のことを書いて居るんだよ。」と発言している。これは彦次郎の「巨石」という小説のことである。この小説では「啄木」とは記されておらず「翠江」という啄木の最初の筆名が使用されている。この筆名は、大正九年の全集の金田一京助の年譜で明らかにされたものである。つまり「翠江」を見て「啄木」と結びつけることが出来るのはこの全集を読んでいたか、彦次郎から直接聞いていたかのどちらかである。いずれ、興味は持っていたとは言える。今後、大正から昭和初期の雑誌を見て、川端だけでなく、啄木に関する記述の有無を調べたいと思っている。

それには、庭から出て、駒場や横浜に行かなければならない。興味はあるのだが、東京は遠いなあと、窓の外を見ている。

二

今度、盛岡大学で彦次郎に関する資料収集を本格的におこなうことになった。今は、数人でチームを組み、古本屋にあたって雑誌を集めている。以前、図書館学の教員と私の二人で彦次郎の文献目録を書誌的に作ったのだが、早速、発行年の間違いが見つかった。実際に、現物にあたってみないといけないと、つくづく思った。数冊集めた段階で、見つかったのだから、これからどれほど間違いが見つけれられるかと、妙な期待感に捕らわれている。それ以上に、新しい作品が見つかること

を期待している。このような作業は、とうてい一人では出来ないもので、川端に詳しい皆さんの情報を、是非とも、お知らせ下さりたく思っている。

そのうち、大学で保管している彦次郎書簡を翻刻して公表したいと準備を進めている。また、夢かもしれないが『鈴木彦次郎作品集』というようなものを二冊本ぐらいにまとめどこかから出せればなあと、思案している。期待はまだある。去年の鶴見大学での大会の宴席で、片山倫太郎さんと彦次郎だけでなく、石浜金作や菅忠雄といったちよつとマインナー系の文学者の研究を何人かでやろうよ」と盛り上がったのだが、呑んだ話しのままで終わっている。今後、彦次郎収集と併せて出来ればと思っている。

〈紹介〉 研究会・学会・研究誌など

姫路文学館

柳 谷 香

姫路文学館は、世界文化遺産・国宝姫路城から北西に少し歩いた閑静な住宅街にあります。姫路市の市制百周年事業の一環として、平成三年四月に開館しました。

郷土にゆかりの作家や歴史学者らの業績と人となりを展示紹介するほか、古代から現代までの播磨地方に関する文学資料の網羅的収集・調査、概ね年三回の企画展、各種講座・

イベントの開催など、播磨の文学情報の発信基地」を目指して、狭義の 文学 にとらわれない幅広い活動を展開しています。

展示対象者は、近代日本史学の確立者三上参次、柳田國男の実兄で歌人・国文学者の井上通泰、哲学者和辻哲郎、阿部知二、椎名麟三、六十年安保世代の天折の歌人岸上大作等々。さらに、父祖の地である姫路に思いを寄せ、自ら「播州門徒の末裔」と称した司馬遼太郎を忘れることはできません。どのコーナーも、自筆原稿や愛用の品々から、さまざまな個性や思索のあとが偲ばれます。

建物は、いずれも安藤忠雄氏の設計による北館と南館から成り、斬新なデザインが特徴的で、これだけでも来館の価値はあり。北館には、常設展示室と企画展用の特別展示室、講堂があり、南館は、司馬遼太郎記念室、図書室(貸出はできません)、映像展示室等を備えています。また、別棟の和風建築「望景亭」は、畳を活かした催しに使用されるほか、茶会や勉強会などの場(有料)として市民にも人気です。

北館の屋上テラスは、実は姫路城を眺める隠れた穴場。新幹線の窓からしか見たことのない人は、ぜひここで優美なお城をバックに写真を一枚どうぞ。

JR姫路駅からは、書写方面行きバスが便利。「市之橋・文学館前」下車、北へ歩いて間もなくです。入館料は、常設展が一般三百円。企画展は別料金となります。

なお、一般の観覧や、開架でのちよつとした調べもの以外に、特に研究や卒論などで閉架資料の閲覧を希望する方には、その都度個別に対応しています。担当の学芸員が、目的やお話を伺った上で準備をしてお待ちしますので、できる限り事前に御相談下さい。急なお申し出の場合、やむを得ずその場で対応できないことがあります。

公立・私立を問わず、文学館施設は、昨今どこも厳しい状況にさらされていますが、姫路文学館では職員一同、息の長い活動になるよう努力を続けています。まずはホームページで一度アクセスしてみてくださいね。

〒六七〇 〇〇二一

兵庫県姫路市山野井町八四番地

TEL (〇七九二) 九三 八二二八

FAX (〇七九二) 九八 二五三三

e-mail kyo-bungaku@city.himeji.hyogo.jp
<http://www.city.himeji.hyogo.jp/bungaku/>

一葉記念館

佐藤 晃子

台東区立一葉記念館は「一葉の文学業績を後世に遺したい」との地元住民の熱意に応え、昭和三十六年にここ台東区竜泉の地に建設されました。女流作家の単独記念館としては我が国初の記念館として開館してから四十余年の歳月が経過しています。

年平均一万二千人程度だった来館者数は昨年度は二万五千人。今年度は現時点で三万人

を超えようとしており、一葉が肖像として選ばれた新五千円札が発行された今月は、小さな小さな記念館が、壊れてしまうのではないかと心配になるほどたくさんの方が来館くださいました。記念館の中にゆっくりと流れていた時間が、急に忙しく動き出したように感じます。

新札発行がもたらした一葉ブーム。

記念館に勤め出して驚いたことの一つが中高年層の方のフットワークの軽妙さ。テレビやラジオで一葉記念館が特集された翌日は、必ず「昨日の番組を見て一度来て見たくて」という来館者の方が大勢いらっしやいます。その番組が深夜の番組であっても。マスメディアの力を痛感するとともに、中高年層の方のパワーに驚かされます。

現在一葉記念館では、特別展「一葉と龍泉寺町 『たけくらべ』の舞台」を開催しています。建物の老朽化が進んだこともあり、2006年秋の完成を目的に改築が決まり、現在その準備が進められております。このため、現記念館での特別展の開催は今回が最後となります。一葉が下谷龍泉寺町に暮らしたのは十ヶ月に満たない期間でしたが、この地で荒物・駄菓子屋を営んだ生活体験から『たけくらべ』が生まれたことを知った地元住民の熱意で生まれた記念館。二十四年という一葉の生涯にとって下谷龍泉寺町での生活はどのような意味があったのかを問い直し、ここに記念館が存在する意義を顕彰することを通

して、今まで一葉記念館を支えてくださった多くの方々へ感謝申上げたいとこの特別展を企画しました。

文学館運営の理想には程遠い記念館ですが、訪れた方が何か気づきをもって帰ってくださいような記念館を目指して、今あるものを大切にしていっ歩ずつ進んでいきたいと思えます。

阿部知二研究会のこと

森本 穫

姫路地方を中心に、「阿部知二研究会」を作ってから十年あまりになります。

知二は姫路生まれではないのですが、少年時代以降は姫路に住んだので、姫路出身といっても誤りではないのです。

阿部知二研究会は、知二の人間と文学を、より深く知ろうというのが目的で、現在会員百二十名ほどです。

この研究会がほかと違って点があります。それは知二の研究者の会ではなく、一般市民と研究者の双方が入会し、双方が刺激しあつて上記の目的を達成しよう、というものです。

研究者たちが探究したものを、できるだけわかりやすく一般市民に説明する、還元する、という形を取っています。ですから市民の会員も、全国にわたっています。

活動は四月下旬に知二忌のあつまり、秋の終わりに秋季研究大会、それに年三回（行事のない隔月）の読書研究会、とから成ってい

ます。時々、ニューズレターという会誌をつ
くって、会員に送付しています。

たとえば九月の読書研究会では、阿部知二
の短歌」というタイトルで私が講師をつとめ、
レジメを作っておいて、知二の短歌と一緒に
読みました。

知二は八高時代に熱心に作歌しており、そ
の後も、折々 たとえば戦地で 作って
います。知二にとっては、親しみやすいジャ
ンルのようです。

参加は二十五名、姫路文学館の和室 望
景亭で行いました。

ここでちよつと姫路文学館について説明し
ますと、播磨出身の文学者の資料を集め展示
していることはもちろんですが、その活動の
多彩さにあります。この地域の文学活動の拠
点といった趣があり、幾種類もの講演会をは
じめとして、いろいろな文学活動の場になっ
ているのです。安価に場所を貸してもらえる
のも、我々にはありがたいことです。

姫路城のすぐお隣に、安藤忠雄さんの設計
による瀟洒な建物が建っている、それが文学
館です。お近くにおいでの際は、ぜひ姫路文
学館に立ち寄ってみてください。

室生犀星学会

河野 基樹

凡そふた昔くらい以前のことであつただろ
うか、北陸・金沢に「室生犀星学会」という
名の学術団体があり もちろん今もあり

ますよ、特に、秋口の頃のその毎年の
集まりは、色々な催し物が目白押しであつて、
それは・それはとても楽しいらしい、という
噂を耳にしたことがあつた。

当時は、「学会」と呼ばれるそのような会に
どうやったら参加できるのかも小生は知らず、
また、それを懇切に教示し下さるような先達
も周りに見当たらなかつたことから、いつし
か、何となくだいぶん時も過ぎたことであつ
た。それが最近になって、東京において、こ
の会の「東京のつどい」とでもいうのだろう
か、勉強の会があることを教えて下さる方が
居られて、勇んで参加したことであつた。

この「東京例会」は、隔月に年五回催され、
研究発表者を募つて、週末の一日、通常二人
の学術発表を行う。また、大会は春（金沢）
と秋の二回開催。「室生犀星研究」を発行（現
在、27 輯）。ここに最近の会の「案内」を書
き写しておこうと思う。ちなみに例会では、
犀星晩年の昭和三十年代の小説が終り、昭和
二十年代の小説を扱っている。

9月25日東京例会

「黄と灰色の問答」論（小川原健太）

「蝶紋白」論（木村洋子）

11月27日東京例会

「餓人伝」論（島崎昇児）

「お天気博士」論（澤田繁春）

室生犀星とその文学が、「好きでたまらな

い」とか、「語り合う場がほしい」と感じてお
られる方には、ご参加をお薦めしたい（河野
まで問合せを）。川端文学研究会の会員からは、
澤田繁春、竹内清己、森晴雄、山田吉郎（五
〇音順）の諸氏がこの会に参加されている。
会員の登録をすれば、先述した、例の楽しい
秋の全国大会の「案内」状も、お手元に届き
ます。

事務局 金沢学院短大 笠森研究室

〒九二〇 一三〇三 金沢市末町十

「私小説研究」

梅 澤 亜 由 美

今回、川端文学研究会の「会報」で紹介さ
せていただくこととなつた「私小説研究」は、
法政大学大学院私小説研究会が刊行している
研究誌である。二〇〇〇年三月に創刊し、現
在、第五号までが刊行され、二〇〇五年三月
に向けて第六号の準備をしている。「私小説研
究」では、研究会活動の成果として発表され
る会員の論文・小論と、肯定、否定に関わら
ず私小説に対する多くの意見を集めるための
エッセイ、インタビューをはじめとする依頼
の原稿とによって、私小説とは何かを探索し
ている。また、毎号特集テーマを設定してお
り、これまで創刊号から順に 戦後文学と私
小説 私小説の源流 私小説・女たちの展
開 戦争と私小説 私小説・その境界 と
いったテーマを扱ってきた。

研究会活動は、会員による研究発表と研究

誌の編集作業とで成り立ち、現在は二〇人程で活動をしている。研究発表は、「小説研究」に論文・小論を発表する会員の一応の義務となっており、一回につき一人が発表、二時間程皆で討議を行う。現在は、一月二回のペースで行われており、先頃の一〇月二八日の研究会をもって通算八一回となった。これらの内容は 研究会報告 として、研究会のホームページ上で公開する形をとっている。

(<http://www2.tky3web.ne.jp/~tomasu/i-no-vel/>)。組版を含めて、研究誌を会員で作成していることから、一月半ばに編集作業がはじまると、査読、校正作業が毎週のように続く。

川端文学研究会との縁を書く、私にとつて、川端文学研究会は学会、研究会を含めてはじめて所属した会であった。また、二〇〇〇年からの三年間、事務局を担当したことにより、研究会を運営する上で様々なことを学んだ。そういうことから、私小説研究会の運営方法は自然と川端文学研究会を参考にしているところがある。川端文学研究会では、それまで論文でしか知らなかった多くの方々とお近づきになることができ、これまで「私小説研究」掲載のエッセイ、書評、アンケートと様々な面でご協力いただいた。

なお、値段は全号一冊八〇〇円(税込み、送料別)で、販売方法は直販のみ。葉書による注文(〒162 0843 新宿区市谷田町二五 一一一 法政大学92年館 9F 日本文学専攻室内)、あるいはEメールで研究

会のアドレス(inovel@tky2.3web.ne.jp)に注文して頂く形となっている(興味を持たれた方、ぜひご購入下さい)。

「弱き器」「火に行く彼女」「鋸と出産」

の初出について

森 晴雄

これまで未確認であった掌の小説「弱き器」「火に行く彼女」「鋸と出産」の初出誌「現代文藝」(大正13年9月号)が、曽根博義によつて確認された。(詳細は同氏の「CABIN」二〇〇四年三月号掲載の「川端康成『夢四年』の初出稿」を参照)。三作の初出「夢四年」は「1」「4」の全四節で構成され、「四年間の日記から一年に一つづつ夢を四つ書き抜いてみる。」と書き出された一篇の小説。「1」が定稿の「弱き器」、「2」が「火に行く彼女」にほぼ全文生かされ、「4」は大幅に改稿されて「鋸と出産」としてまとめられ題名が付されて、『感情裝飾』(金星堂 大正15・6)に収録された。なお、「3」は狂犬の話で全集未収録。

これらの初出について触れた論文に、福田淳子「川端康成全集未収録作品『夢四年』論」「夢四年」から「弱き器」「火に行く彼女」「鋸と出産」へ(「学苑」七六四号 平成16・5)、ならびに森晴雄「川端康成『鋸と出産』論 爽やかな喜び」(「解釈」平成16・7・8)、

「川端康成『弱き器』論 堀辰雄『鼠』に触れつつ」(「群系」平成15・10)などがある。

川端康成参考文献 平成15年度 10月～16年12月 森晴雄

1 単行本

大久保喬樹 『川端康成 美しい日本の私』ミネルヴァ書房 平成16年4月

新潮文庫編 『文豪ナビ 川端康成』 12月

2 紀要

種岡尚子 川端康成『山の音』論 信吾と菊子の関係性をめぐって
「玉藻」39号 フェリス女学院大学国文学会 平成15年11月

仁平政人 川端康成「招魂際一景」の方法と位相
「日本芸論稿」28号 東北大学芸談話会 11月

三浦 卓 川端康成「たまゆら」試論 定型化への縮図として
「三田国文」38号 慶應義塾大学国文学研究室 12月

金 順熙 川端康成「伊豆の踊子」記憶される「私」の伊豆旅行 「解釈」平成16・1、2

金 恵妍 川端康成『雪国』考察 島村の空虚について
「論集」37号 梅光学院大学・女子短期大学部 1月
『山の音』に描かれている女性たち 菊子の両面性を含めて
「日本文学研究」第39号 梅光学院大学日本文学会 1月

西現寺雅絵 川端康成「死体紹介人」の「私」 その機能
「相模国文」31号 相模女子大学国文研究会 3月

三田英彬 川端康成と湯ヶ島 「大正大学研究紀要」89号 3月

高橋真理 川端康成の「犯罪」小説 「『鬼熊』の死と踊子」「それを見た人達」「田舎芝居」「金塊」
「明星大学研究紀要」12号 3月

羽鳥徹哉 「再会」その他 終戦前夜の川端 「成蹊国文」37号 3月

鄭 香在 「雪国」の映画性と文学性 「成蹊国文」37号 3月

羽鳥徹哉 「ある人の生のなかに」について 「成蹊大学文学部紀要」 3月

河野育子 川端康成「青い海黒い海」考
「神女大國文」15号 神戸女学院大学国文学会 3月

緒方維章 川端康成「火に行く彼女」試行(一) その 胸の嘆き を繞り
「和洋国文研究」39号 3月

福田淳子 川端康成全集未収録作品「夢四年」論 「夢四年」から「弱き器」「火に行く彼女」「鋸と出産」へ
「学苑」764号 5月

東雲かやの 川端康成、その“政治”的まなざし 「たんぼぼ」を読む
「法政大学日本文学誌要」 7月

片山倫太郎 川端康成における宗教関連文献の受容についての調査研究(一) 『海の火祭』および『抒情歌』における仏書二点
「岡山大学文学部紀要」41号 7月

坂元さおり 川端康成と朱天心、二つの 古都 暴露 隠蔽される暴力性の所在
「日本語日本文学」29号 輔仁大学外語学院 7月

3 雑誌

森 晴雄 川端康成「スリの話」 胎動の高電圧 「雲」平成15年10、11月

川端康成「母」 母親・結婚讃歌 「雲」12月～平成16年5月

川端康成「土産」 道徳 「雲」6月～8月

川端康成「質屋にて」「居丈高」と“無愛想” 「雲」9月～12月

川端康成「鋸と出産」論 “爽やかな喜び” 「解釈」7、8月

片山倫太郎 『雪国』の改稿にみる「物語」の方法への素描

- 岡山大学文学部プロジェクト研究報告書『日本幻想小説の詩学と物語論』 2月
- 高橋真理 川端康成と富士 「国文学」3月
- 副田賢二 「浅草紅団」をめくって 「復興の東京」と「女」たち
「昭和文学研究」48号 3月
- 曾根博義 川端康成「夢四年」の初出稿 「C A B I N」第6号 3月
- 高比良直美 川端康成「たまゆら」調査から見えてきたもの 「青淵」 3月
- 張 月環 川端康成の『有難う』の遠近
「東アジア 日本語教育・日本文化研究会」第七輯 3月
川端康成の『美しさと哀しみと』における音子の愛の行方 「解釈」7、8月
- 玄侑宗久 「みずうみ」という魔界 川端康成『みずうみ』 「新潮」6月
- 十重田裕一 つくられる「日本」の作家の肖像 高度経済成長期の川端康成 「文学」11、12月
- 深沢晴美 川端康成「虹いくたび」論 虚空にかかる 反橋 / 虚像の反復
「芸術至上主義文芸」 11月

4 単行本所収論文

- 柳沢孝子・高橋真理『文章の達人 家族への手紙 1 父より娘へ』ゆまに書房 平成15年11月
安らかな日々の中で 柳沢孝子
第一章 そばにいて教えてあげたいと... 父の思い 川端康成 政子あて(三通)
第二章 ながさきへついたついた... 旅路にて 川端康成 政子あて(五通)
戦いの中で 高橋真理
第一章 ぜひ生き延びて 戦時下の父 川端康成 政子あて(一通)
第二章 変わり過ぎるぐらい変わってしまった 新しい時代に 川端康成 政子あて(二通)
- M・J・プラダ=ヴィンセンテ 第二部 日本文学の運命 第五章モデルニスモと川端康成
第六章 美しい日本の私
『日本文学の本質と運命 『古事記』から川端康成まで』九州大学出版会 平成16年1月
- E・G・サンデンステッカー 「5 文人たち」
『流れゆく日々 サイデンステッカー自伝』時事通信社 7月
- 川西政明 川端康成の終焉 日本と向き合う 『小説の終焉』岩波新書 9月
- 平岡敏夫 夕暮れ の少女たち 「川端康成『掌の小説』より
『夕暮れ の文学史』おうふう 10月
- 坂崎重盛 「新宿御苑 川端康成『山の音』」
『一葉からはじめる東京町歩き』実業の日本社 10月

5 新聞

- 魔界が持つ深淵 大久保喬樹氏に聞く『川端康成』 「図書新聞」2676号 平成16年5月1日
- 平間彌生さん 川端康成氏との出会い 少女の純粋性と見抜く 「読売新聞」10月25日

6 書評

- 羽鳥徹哉 大久保喬樹著『川端康成 美しい日本の私』 「週間読書人」6月4日
- 佐藤秀明 平山城児『川端康成 余白を埋める』
「日本文学」91号 立教大学日本文学会 12月
- 山田吉郎 森晴雄著『川端康成「掌の小説」論 「雨傘」その他』
「室生犀星研究」26 平成15年10月
- 河野基樹 森晴雄著『川端康成「掌の小説」論 「雨傘」その他』
「芸術至上主義文芸」29 11月
- 村木 哲 精緻な書誌的分析 川端文学の「達成」を解読する“入り口” 森晴雄著『川端康成

「掌の小説」論 「貧者の恋人」その他」 「図書新聞」2704号 12月4日

補遺 平成15年1月～9月

竹内清己 川端康成『伊豆の踊子』 伝承のシステム

川端康成『雪国』 空間システムと伝統様式

川端康成の芸術家悲劇論

川端康成の死生観

『日本近代文学伝統論 民族／芸能／無頼』おうふう 平成15年1月

川端康成 (誰もが魅了される回春のベット)

達人倶楽部 編著『性の取憑かれた文豪たち 達人たちの悦楽』ワンツーマガジン社 4月

富岡幸一郎 2 戦後1 川端康成『眠れる美女』 エロスが純粋な極限がゆらめく、異様な傑作

『打ちのめされるような すごい小説』 飛鳥新社 6月

二瓶浩明 『硝子』の思想 千葉正昭・田中実編『技術立国ニッポンの文学』鼎書房 3月

金 順熙 梶井基次郎と川端康成 梶井基次郎「川端康成第四短篇集『心中』を主題とせるヴァ

リエイション」を中心に 「文芸研究科論集」30号 3月

中嶋展子 川端康成『片腕』の構造 「国文論稿」 岡山大学言語国語国文学会 3月

韓 輝源 川端康成「みづうみ」論 「日本文学論集」27号 大東文化大学大学院 3月

三浦 卓 川端康成「住吉」論 事態としての「引用」

「藝文研究」84号 慶応義塾大学藝文学会 6月